

第8回

日本医師会

# 赤い賞

かかりつけ医たちの奮闘

受賞者紹介



主催 日本医師会／産経新聞社

特別協賛  太陽生命

日本医師会

# 赤ひげ大賞

## 目 次

- 3 第8回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要
- 4 主催者挨拶 日本医師会 会長 横倉 義武
- 5 主催者挨拶 産経新聞社 代表取締役社長 飯塚 浩彦
- 6 協賛社挨拶 太陽生命保険株式会社 代表取締役社長 副島 直樹
- 7 祝辞
- 8 選考委員コメント
- 受賞者紹介
- 9 木澤 健一 (岩手県 木沢医院)
- 14 内田 好司 (群馬県 内田病院)
- 19 湯川 喜美 (鳥取県 湯川医院)
- 24 釈舎 龍三 (広島県 ときや内科)
- 29 古江 増蔵 (鹿児島県 医療法人・社会福祉法人桃蹊会)
- 34 赤ひげ功労賞 受賞者
- 37 全国の赤ひげ先生へのメッセージ
- 38 選考講評 日本医師会 常任理事 城守 国斗
- 39 第9回「日本医師会 赤ひげ大賞」推薦概要



## 第8回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、公益社団法人日本医師会と産経新聞社が主催し、「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」を目的として、厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジの後援のもと、平成24年に創設（第6回より太陽生命保険株式会社が特別協賛）されました。各都道府県医師会から候補者を推薦していただき、選考委員の厳正な協議を経て、第8回「日本医師会 赤ひげ大賞」の大賞5名と、今回新設された功労賞18名の受賞が決定しました。

- 主 催** 日本医師会、産経新聞社
- 後 援** 厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
- 特別協賛** 太陽生命保険株式会社
- 対 象 者** 病を診るだけではなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員及び都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日医・都道府県医師会役員は除く）。
- 推薦方法** 本賞受賞にふさわしいと思われる方1名を各都道府県医師会会長が推薦

- 選考委員** 羽毛田信吾（昭和館館長、宮内庁参与）  
向井 千秋（宇宙航空研究開発機構特別参与、東京理科大学特任副学長）  
檀 ふみ（女優）  
ロバート キャンベル（国文学研究資料館館長）  
河合 雅司（作家、人口減少対策総合研究所理事長）  
吉田 学（厚生労働省医政局長）  
小玉 弘之（日本医師会常任理事）  
城守 国斗（日本医師会常任理事）  
鈴木 裕一（産経新聞社上席執行役員）  
乾 正人（産経新聞社執行役員論説委員長）

日本医師会 会長 横倉 義武



「日本医師会 赤ひげ大賞」は、地域医療の現場で長年にわたり地域住民に寄り添い地道に尽力されている先生方を「現代の赤ひげ先生」に見立て、その功労を顕彰することを目的として、平成24年に創設したものです。

「赤ひげ大賞」の名称の由来は、山本周五郎の時代小説「赤ひげ診療譚」にあります。この「赤ひげ先生」の実在のモデルは、江戸中期に貧民救済施設である小石川養生所で活躍した小川篁船と言われていますが、貧しく不幸な人々に寄り添い、身を粉にして働く頼もしい医師というイメージを思い起こす方も多いのではないのでしょうか。

8回目となる今回から、より多くの先生方の功績を顕彰したいとの思いの下、「赤ひげ功労賞」を設けさせて頂き、18名の先生方を「赤ひげ功労賞」に、そして、5名の先生方を「赤ひげ大賞」に決定いたしました。

今回の表彰式は新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で延期とせざるを得ませんでした。いずれの方もこの「赤ひげ」という名にふさわしい、各地域において、献身的に医療活動に従事され、患者さんの信頼も厚い方々ばかりであります。

今回の受賞者にも4名90代の方がおられますが、我が国では超高齢社会となり、人生100年時代を迎えると言われております。そのような中で医療に求められる役割もこれまでの病を治す医療だけでなく、予防にまで広がり、健康で暮らしていただく時間をいかに長くするかが大きな課題になっています。

全ての人々が安心して暮らせる、かかりつけ医を中心としたまちづくりの実現のため、日本医師会では今後も地域の医師達へのバックアップに全力で取り組んで参る所存です。

読者の皆さま方にも、ぜひかかりつけ医をもっていただくとともに、地域住民の方々にも寄り添った形で医療を展開している全国の赤ひげ先生がますます活躍できますよう、なお一層のご支援・ご協力を賜りますことをお願い申し上げます。

末筆ではございますが、改めまして、共催の産経新聞社、ご後援の厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ、特別協賛いただきました太陽生命保険株式会社を始め、本事業の実施にご尽力いただきました方々に、心より御礼申し上げます。

受賞者の先生方、誠におめでとうございます。



「第8回赤ひげ大賞」受賞者の皆さま、ならびにご家族の皆さま、誠におめでとうございます。

平成24年に創設された「赤ひげ大賞」は、今年で8回目を迎えました。今回は、新たに「赤ひげ功労賞」を設け、合計18名の先生方を「赤ひげ功労賞」に、そして、5名の先生方を「赤ひげ大賞」に決定いたしました。いずれの受賞者も、地域社会の信頼を得ながら、住民の健康な生活を支えてこられた方ばかりで、まさに「現代の赤ひげ先生」たちです。

今回の受賞者の中には、これまでで最高齢となる98歳の「赤ひげ先生」、古江増蔵先生もいらっしゃいます。先生は98歳になったいまも介護老人保健施設で従事され、施設内を電動カートで巡回されています。「人生100歳時代」が叫ばれる中で、まさに現役で活躍し続けている医師です。

産経新聞社でも、誰もが100歳まで生きることが当たり前になる時代に備えて、3年前に「100歳時代プロジェクト」をスタートさせ、人生設計に関するシンポジウムやフォーラムの開催など、さまざまなプロジェクトに取り組んでおります。

多くの方が100歳まで生きられる時代を迎え、一人ひとりの人生設計も、社会の仕組みも、大きな変化を求められています。年齢を重ねてもいかに健康に、毎日を充実させて生きるか。われわれも様々な提言を行ってまいりたいと思いますが、申し上げるまでもなく、この健康な100歳時代を支えるのは、地域に深く根差した医療であり、その医療活動に携わる医師の皆さま、医療関係者の皆さまであります。今後とも皆さまのご尽力を心よりお願いしたいと思います。

私ども産経新聞社は、報道機関として、日本の医療の充実、さらには国民の長寿と健康的な生活の一助となるべく、これまで以上に邁進していく所存でございます。今後とも、皆さま方の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

結びになりますが、特別協賛をいただいております太陽生命保険株式会社さまをはじめ、ご協力、ご尽力いただきました方々に、心より御礼申し上げます。受賞者の方々、誠におめでとうございます。

太陽生命保険株式会社  
代表取締役社長

### 副島 直樹



「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞された5人の皆さま、ならびに「赤ひげ功労賞」を受賞された皆さま、誠におめでとうございます。

当社は2017年より「日本医師会 赤ひげ大賞」に協賛させていただいておりますが、毎年地域医療に向き合わせ、ひたむきに尽力されてきた素晴らしい先生方の姿勢にいつも感銘を受けており今回受賞された先生方にも深く敬意を表します。

私たちが全国どこでも高水準の医療を当たり前のように受けられるのは、地域に密着した医療を担っている先生方のおかげです。

日本では少子高齢化が進み、65歳以上のシニア人口は増加を続け、2025年には総人口の30%を占めることが見込まれるなど、世界でも類を見ない超高齢社会を迎えます。

そのような状況下、地域に寄り添うかかりつけ医の先生方の役割はますます重要となる一方で、かかりつけ医は不足しているとも伺っております。

今回、表彰式は残念ながら延期となってしまいましたが、今後も赤ひげ先生が地域医療を支えてこられたことを次世代に伝えていく事は、後進を育成していくうえで非常に重要であり継続していただければと思います。

当社は、2016年6月より「人生100歳時代」を見据え「健康寿命の延伸」、すなわち元気に長生きするという社会的課題に応えるため、「太陽の元気プロジェクト」を開始しております。2019年4月からは、お客さまの暮らしに寄り添った生命保険会社として、健康で長生きを喜べる社会の実現に向け「元気!長生き!太陽生命」をキャッチフレーズとして、新中期経営計画をスタートさせております。

かかりつけ医の先生方による地域の人々の「元気」「長生き」に向けた活動は、当社の取り組みとも合致しております。プロフェッショナルとしての赤ひげ先生の姿を、より多くの方々に伝えていけるように今後も微力ながら応援し続けたいと思っております。

最後になりますが、受賞者の皆さまと全国各地の赤ひげ先生のますますのご活躍と、日本医師会および産経新聞社のご関係者の皆さまのご健勝を心より祈念申し上げてご挨拶とさせていただきます。

「赤ひげ大賞」ならびに「赤ひげ功労賞」受賞の先生方、誠におめでとうございます。

厚生労働大臣 加藤 勝信



栄えある第8回「日本医師会 赤ひげ大賞」において「赤ひげ大賞」を受賞された5名の方々及び今回から新たに創設された「赤ひげ功労賞」を受賞された18名の方々に対し、心からお祝いを申し上げますとともに、地域医療の現場で、長年にわたり貢献してこられた活動に、深く敬意を表します。

受賞者の皆さまにおかれましては、住民が安心して生活を送れるよう、それぞれの地域医療の現場で、地域に寄り添いながら、日夜取り組んでいただいていると伺っております。

岩手県で、東日本大震災の際に災害医療に尽力され、現在でも地域住民の健康管理に取り組んでいらっしゃる木澤 健一さま、全国に先駆け、認知症高齢者の行方不明事故を防止し、地域で見守る官民一体のシステム構築に貢献された内田 好司さま、女性開業医として地域医療の最前線で、在宅診療、看取り診療、そして公衆衛生の拡充にも従事されてきた湯川 喜美さま、困難が多い離島の医療に従事し、救急医療のみならず、介護老人保健施設の嘱託医、学校医等、かかりつけ医として島民を支えていらっしゃる釈舎 龍三さま、鹿児島県で70年以上にわたり地域住民の健康管理に尽力され、100歳を迎えようとしている現在でも現役で活躍されている古江 増蔵さま、また、今回から新たに創設された「赤ひげ功労賞」を受賞された皆さまも、大賞受賞者の方々同様、それぞれの地域で献身的、継続的な活動をされてきたこと、改めて深く敬意を表します。

長年にわたり地域住民の健康を支え続けている崇高な使命感と行動力は、まさに現代の赤ひげ先生であり、全国津々浦々で地域医療に携わっていらっしゃる医師の方々の励みとなるものです。

年を重ねても健康を維持し、また病気になっても重症化を防ぐことにより、住み慣れた地域で長く暮らすことのできる社会を支えるのは、地域の方々にいつも寄り添い、頼りにされる「かかりつけ医」の存在です。受賞された皆さまをはじめ、「かかりつけ医」を支えるべく、各都道府県と協力しながら、地域での医療、そして介護の総合的な確保に努めてまいります。

また、地域医療構想の実現に向けた取り組み、医師をはじめとする働き方改革及び地域の医師偏在解消にも、全力をあげて取り組みます。これらの実現に向けて、「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞された方々のように、現在地域の第一線で活躍されている皆さまには、引き続き御理解と御協力をたまわれますと幸いです。

最後に、受賞者の皆さまが今回の御受賞を契機としてさらに地域において御活躍されることを祈念して、私の挨拶といたします。

## 第8回 赤ひげ大賞選考委員コメント

### 羽毛田 信吾 委員

今年は特に女性医師、高齢の医師が多かった印象だ。地域で長く医療に従事してきたという裏には、地域住民からの信頼があったはず。悩ましい選考だったが、赤ひげ先生の功績を顕彰することで、後に続く志のある若い医師が奮起する契機にしてほしい。



### 向井 千秋 委員

地域との密着性や医師としての継続年数、女性活躍などを考慮した。現代の赤ひげ像とは何か毎回悩みながらの選考だが、知識だけでなくどうやって人に寄り添っていくかを若い医師が考えられる素晴らしい賞として継続していくことを願っている。



### 檀 ふみ 委員

事前に候補者を選考するときは、命に向かって仕事をしている先生に優劣はつけられないと悩んで徹夜になってしまふ。大賞にならなかった先生も含め、皆さんが素晴らしい仕事をしている。世の中にこれだけの素晴らしい先生がいることを誇らしく思った。



### ロバート キャンベル 委員

長い期間、地域住民に寄り添い、住民の健康管理に貢献した先生や、災害発生時の対応、難病の筋萎縮性側索硬化症（ALS）への取り組みなど、強い使命感を持つ先生を高く評価しました。



### 河合 雅司 委員

今回は女性の推薦が多く、世の流れを感じた。地方を歩いていると、医師は地域そのものだと思う。医師がいないところには人は住めない。それが危うくなっているこの国で、大賞に選ばれた先生たちには地域医療の太陽になっていただきたい。



### 吉田 学 委員

多くの先生が医療を通じて日々地域と向き合い、支えていることが伝わってきた。在宅看取りやたび重なる災害など取り組むべき課題が多くある中、健康を中心に地域住民の生活を支えるかかりつけ医機能の重要性を再認識した。この賞が、若い医師が地域医療を考えるきっかけになればと思う。





被災地の患者を支え、地域の復興と医療の再生に力を注ぐ

木沢医院 院長

# 木澤 健一

[ 岩手県 ]

きざわ・けんいち 木沢医院院長。昭和3年、新潟県見附市生まれ。91歳。岩手医学専門学校卒。昭和38年に木沢医院を開業、長年にわたり地域医療を担い、東日本大震災では自らも被災しながら速やかに診療を再開。被災住民の大きな心の支えとなった。



(早坂洋祐撮影)

本州最東端に位置する岩手県宮古市の中心部から南に車で15分あまり、宮古湾から多くのサケが遡上(そじょう)する津軽石川流域に開業してから足かけ57年になる。患者の7割は子供時分から診ている顔なじみ。「どうしたんだ今日は?」「ちゃんとご飯は食べてっか?」—と気さくに声をかける。

## | 常在戦場の心得

平成23年3月11日午後2時46分、昼休み後に2人の患者の診療を終えた直後だった。2階建ての病院が東日本大震災の激しく異様に長い揺れに襲われた。「えらい揺れ方だった。これはとんでもないことが起きる」と直感した。院内に残っていた十数人の患者を看護師と職員の車に分乗させて、「お前たちも家に帰りなさい」と一緒に避難させた。

地震からほぼ40分後、車で避難しようと準備を

している矢先に津軽石川を遡上してきた津波が堤防を越えた。病院は見る間に黒い水の塊に取り囲まれた。水深は50センチに達し、2階に避難するしかなかった。「2階で入院用のベッドを積み重ねた上で、妻とこれで駄目なら仕方ないと覚悟を決めた」と当時を振り返る。

浸水は1階天井付近で止まり、九死に一生を得た。1階の診療室と自宅はメチャメチャになったが、自宅2階で寝起きしながら復旧作業に取りかかった。患者の多くは持病もちで毎日の薬が欠かせないからだ。「せめて薬だけでも出してやろう」と、懸命に作業を続け、震災から4日目、2階で診療再開にこぎつけた。

開院時間は午前8時～午後6時。ところが、大災害の緊急事態である。ほぼ毎日が時間外診療、午後9時まで患者を診る日もあったという。これが20日間も続いた。「津波につかって濡れたカルテを洗濯



生涯現役を貫く木沢医師を支える病院スタッフ



東日本大震災で1階部分が水没した木沢医院



診察中に患者との和やかな会話が聞かれた



地域住民のほとんどが1度は診察を受けている

ばさみで挟んで所狭しと干してあったのをいまも鮮明に覚えています」。こう話すのは震災後の過労から40度近い高熱を発し、2階で点滴を受けた近所の主婦(63)。

旧制長岡中学(現・新潟県立長岡高校)時代に学んだ、いつも戦場にいる心構えで事に当たる大切さを説いた長岡藩の藩是「常在戦場、を見事に実践してみせた。「質実剛健の校風で、ずいぶんと鍛えられた。それがいまの自分の原点。医者の基本は相手の心情を思いやること。苦難を乗り越える覚悟がないといけない。震災はそれが間違いでなかったことを確認させてくれた」と言う。

## 「ここにいどがん(ここにいろ)」

人生の道しるべになったのは商才にたけ、東京・銀座で高級呉服店も経営した父親のこんな言葉だった。「俺は自分のために金もうけをした。お前は官僚になるか医者になるか、人のためになることをやれ。学校に行くなら東京ではなく地方の学校へ行け」

旧制中学4年で医者の道を志し、昭和20年に盛岡市の岩手医学専門学校(現・岩手医大)に進んだ。26年から現場の医師となり、32年に専攻生として岩手医大第三内科講座に入局、36年に博士学位を取得した。これを区切りに新潟県の郷里に帰るつもりだった。

ところが、日本一の定置網漁師と評されていた山根漁業部(宮古市赤前)の山根三右衛門社長の「ここにいどがん(ここにいろ)」の一言で現在地に開業することを決意した。かつてこの地にあった宮古市国民健康保険直営診療所長として30年から4年間勤務、患者の一人だった山根社長が開業資金融資の保証人になると申し出てくれたからだ。

半農半漁で医療資源の乏しい地域事情を熟知していた。労を惜しまない診療ぶりは住民の信頼



50年以上にわたり地域の医療を支えてきた

を集めていた。若狭ヒテさん(91)は同年齢のかかりつけ医を「夫の命の恩人」と呼ぶ。妊娠中に、原因不明の熱病を発症し暴れる夫に何度も突き飛ばされた。

同年齢のかかりつけ医は診療所に若狭さんの夫を入院させ、宮古市中心部にある県立病院に自ら足を運んで研究。南方戦線に従軍していた当時に感染、潜伏していたマラリアが熱病の原因であることを突き止め、3年がかりで完治させた。

その一方で、「診断で解けない疑問が残ったら躊躇なく上級病院に送る」を実践してきた。かつて医院の隣に住んでいた中嶋敏孝さん(73)が言う。「おふくろが問診の際にトイレで下血があったと答えたら、県立病院に行った方がいいと手配してく



患者への思いやりと苦難を乗り越える覚悟で、地域の復興と医療の再生に力を注ぐ

れ、直腸がんが見つかり、摘出手術を受けることができました」

80歳を超えても電話1本で気軽に往診、地元小中学校の学校医はいまも現役で、地域住民は1度は診察を受けている。「地域にとってかけがえのない先生なんです」。地元の町内会である本町協会の若狭斌会長(81)は大多数の住民の声をこう代弁した。

## 交通事故で肋骨を8本を折る重傷

凝り性でもある。趣味で始めたニシキゴイで全日本愛鱗会の副会長や全国大会の審査委員長などを歴任、ニシキゴイの目利きの第一人者でもある。85歳ごろまで続けたゴルフは「医者とはシングルになると仕事がおろそかになる」とハンデを12から13に抑えていた。

意志の強さも格別だ。両切りの缶入りピースを好

む大の愛煙家だったが、健康のため40歳でタバコをキッパリやめた。平成14年から10年間は酒席の機会が多い宮古医師会会長を務めた。ところが、定期的に禁酒する習慣があり、期間中はいくら勧められても一滴も酒を口にしなかったと言う。

昨年10月27日、不運に襲われた。会議に向かうため道路を横断中に前方不注意の車にはねられ、肋骨を左5本、右3本の計8本骨折する重傷を負い、40日間の入院を余儀なくされた。懸命のリハビリで診療再開にこぎつけ、生涯現役の決意を新たにした。

うれしい出来事も。医師の道を選んだ3人の息子のうち岩手医大に勤務する二男の哲也さん(50)が「2番目の俺がやるよ」と後継者に名乗りを上げてくれたからだ。すでに長男は宮古市中心部、三男は山田町にそれぞれ開業、事故の後遺症と闘う日々の中で何よりの朗報に満面の笑みがこぼれた。

(石田征広)



認知症高齢者を地域で支えるシステムづくりに尽力

内田病院 顧問

# 内田 好司

[ 群馬県 ]

うちだ・よしじ 医療法人大誠会内田病院顧問。昭和11年、群馬県沼田市生まれ。83歳。群馬大学医学部卒。利根中央病院外科医長を経て、51年、内田外科医院を開業。63年には医療・介護に一体的に対応できる医療機関を目指した内田病院(病院99床+介護老人保健施設50床)を開設。平成4年には県下初の認知症専門棟(50床)も設置した。23年まで理事長。県警察医も務めている。



(宮崎瑞穂撮影)



医院の屋上に上がり、「開業当時は高い建物がなかった」と話す内田医師。屋上からは武尊山や谷川岳などの山々が見える

病院スタッフや患者らからは親しみを込めて「大先生（おおせんせい）」と呼ばれる。毎日、4、5キロのウォーキングは欠かさず、週1回は外来診療。必要があれば手術も行。実にエネルギッシュな日々を送っている。

受賞に際して大先生は「高齢者の医療・介護に関心をもってやってきたことが評価されたのだと思う」と語り、病院の前身である内田外科医院時代に思いを馳せた。

## ｜高齢者の受け皿

同医院は19床の有床診療所。高齢化が進むにつれ、おむつを必要とする入院患者が出るようになった。でも当時はおむつの対応は看護婦の仕事にあらずという考えが強く、おむつを必要とする患者の入院は拒否されてしまう。

医療的措置は不要で退院できる状態なのに、家庭で看ることのできない高齢者が他の医療機関で

引き続き入院生活を強いられる。いわゆる社会的入院のケースが増えていった。

「病院と家庭の受け皿となる施設が絶対に必要」。そうした思いとともに焦燥感を募らせる毎日。そんな時に飛び込んできたのが、国の中間施設-病院と家庭の間の施設-建設構想だった。

「さっそく厚生省に行き、担当課長と交渉するうちに200～250床との感触を得た」。時をおかず病院部門50床、中間施設200床規模の病院建築にとり



群馬県沼田市の内田医院

かかったが、県の対応で医療法人大誠会内田病院は病院99床・介護老人保健施設50床でのスタートを余儀なくされた。

それでも、病院と老健が同一建物内にあるという画期的でシームレスな医療介護連携の先取りだった。

「スケールメリットの面からは経営は非常に苦しかった。平成4年に県内初となる認知症専門棟が認可され、ようやく軌道に乗った」と当時を振り返る。そして、「高度医療は絶対に必要だが、廉価で介護や見守りなどが丁寧のできる施設は社会保障費を逡減するためにも非常に大切」と力説する。



娘が理事長を継いだ後も、注射から手術まで患者さんに誠心誠意向き合い続ける

## ｜ 縛らない看護

平成12年の暮れのある日、東京都八王子市の上川病院総婦長を務めた田中とも江さんの著書「縛らない看護」が衝撃をもたらした。

当時は、認知症高齢者の問題行動による事故を防ぎスムーズな治療を行うためには患者の手足を抑制することは常識だった。だが、著書は『なぜ縛るのか、抑制が死を早めるのではないか、縛らないケアを工夫してどう変わっていったか』などと問いかけてきた。

「『綺麗なご遺体をご家族にお返しする』というくだりにきて、ボロボロと涙がとまらなくなった」。さっそく田中さんと連絡を取り、「何回も足を運んでもらって、病院全体でどうしたら縛らないようにできるか、に取り組んだ」。

14年には拘束ゼロを宣言。現在、病院で「病棟における身体拘束ゼロのためのケアマニュアル-大誠会スタイル」を公開するなど全国への普及活動を継続している。「拘束をしないという取り組みは徐々に浸透しつつある」と話す。

## ｜ 地域とともに

活躍の場は医療だけに限らず、地域全体に及んでいる。

17年5月に発足した「沼田市認知症にやさしい地域づくりネットワーク」。認知症高齢者の行方不明事故を未然に防止し、地域で見守るシステムで旗振り役として立ち上げに加わった。

その4年前に病院の看護師の家族が徘徊し行方不明になるという事件があったことがきっかけだった。「徘徊をする認知症高齢者の後についていったことがあるが、右も左も見ずに歩く。どこへ行く





診察室で患者と親しげに話す



「内田医院」の看板の前で



制服に着替えて警察医として現場に向かう

かわからず、なんとかしなくてはと痛感した」。設立に向けては、「足を使って協力を得るしかない」と関係諸団体への訪問と説明を続けた。

ネットワークは市民の協力を得て高齢者の日常生活を見守る。行方不明情報は警察を窓口に関力団体や企業、携帯メール登録者に一斉に伝えられ発見につなげようというものだ。官民一体の連携は全国の先進事例となった。

設立以来、令和元年12月時点で延べ206人が

無事に発見されるなど大きな成果をあげている。

平成27年暮れからは県警察医も務めている。「活動に熱心な地域の医師会長の影響。受けたからには、いつでもやるよと言っている」。時には夜の10時に呼ばれることがある。取材に訪れた日も、警察からの突然の要請で中断。白衣を紺色の作業衣に着替えて出動していった。

病院や福祉施設を運営する大誠会の理事長は23年に長女の田中志子（ゆきこ）さんに譲った。

「一緒にお酒を飲むとつぶされるのはこっち。休日には美術館を巡ったり、気になることがあるとすぐにインターネットで調べたりと歳を取っているとは感じられない」が父親像。大賞受賞には「娘としても後輩の医師としても父のやってきたことを尊敬している」と言い切った。

沼田市に住む飯田富美子さんには忘れられない思い出がある。40年以上も前、夜中に当時1歳半の次女がカミソリで手を切った。初めて内田外科医院の門をたたき、何度もすいませんと謝った。「そうしたら大先生は『何言ってるんだ。医者には患者さんが困っている時に治すだけ』とおっしゃって」。だから「赤ひげ大賞」受賞は「自分のことのようにうれしい」のだ。

地域医療に貢献して半世紀を超えた。8年かけて書き上げた肛門科の専門書「肛門疾患アトラス」など著書も多い。

「医者には患者さんに対し、誠心誠意つき合う職種」が持論。「年齢を重ねるにしたがって、患者さんと気さくに話をするよう心がけている」と言い、「健康のうちは患者さんに向き合い続けたい」と白い歯をみせた。

（椎名高志）



院内で医療に対しての思いを語る

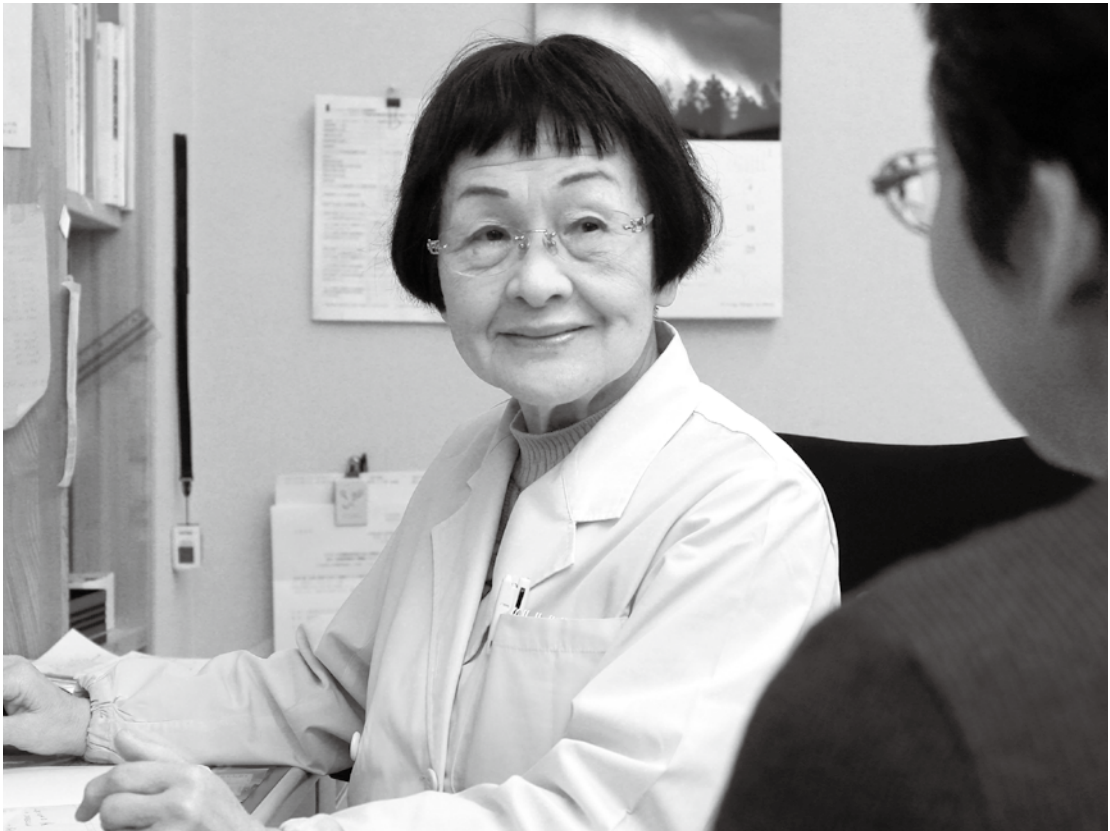
患者家族に寄り添い、きめ細やかな医療を提供

湯川医院 院長

# 湯川 喜美

[ 鳥取県 ]

ゆかわ・きみ 湯川医院院長。昭和11年、鳥取県三朝町生まれ。83歳。鳥取大医学部を卒業後、親族が急逝したため倉吉市で診療所を開業。同市の県立厚生病院の勤務を経て、平成11年に三朝町で再び開業医になった。健康講話の講師を務めるなど地域医療の最前線で活動している。



(山田哲司撮影)

鳥取県中部に位置する三朝町。世界屈指の高濃度のラジウム温泉が噴出する三朝温泉があり、旅館が立ち並ぶ。高齢化率も高く、冬に積雪も多いこの地にある診療所で約20年に亘って治療に情熱をそそいできた。

「お正月に変わったことはなかったですか」「血圧を測りますね。深呼吸しててください」。患者に優しく声をかけ、雑談を交えながら診察する。

83歳となった現在でも、三朝町にある湯川医院の診察室で、次々に訪れる外来の患者を診察している。町の医療の要で、交通の便がよくない地域から来院する患者の負担軽減となっている。

患者からの信頼も厚い。診察を受けにきた町内の70代の女性は「やさしく丁寧に教えてくれる。食事のアドバイスまでしてくれるので助かっている」と話す。

倉吉市にある自宅から毎日通勤している。午前7

時半ごろに到着し、ストーブを付けて診療に備える。午前は正午過ぎ、午後は3時～6時までが診察時間。午前と午後の診療の間に自ら車を運転して看護師と往診先へ向かうこともある。

多忙な毎日だが、「診療所を開けている時間は長い、比較的ゆったりと仕事をしている。県立厚生病院で勤務していたころはカルテがずらりと並んで、昼食が午後2時過ぎになることもあった。いまは一人の患者さんにゆっくりと時間をとれます」と笑顔を見せる。

## Ⅰ 医師が身近

祖父、父ともに開業医で、子供のころから医師が身近だった。

「祖母にとっては私が初孫で、『喜美を医者にするんだ』と言われていた。その言葉に洗脳されたの



優しく声をかけ、診察する



診察にはじっくり時間をかける



自ら車を運転し往診



スタッフの協力もかせない



たくさんのカルテが並ぶ

かもしれません。自分では覚えていませんが、中学の卒業文集に『私は医者になる』と書いていたそうです」。

鳥取大医学部を卒業。京都第二赤十字病院で研修後、鳥取大の医局に入局した。それから1年も経たないうちに叔父が急死し、倉吉市の診療所を受け継ぐことになった。

「経験がないなか院長になるのは不安だったが、地域を支える唯一の医療機関で、私が行くしかなかった。経験がないぶん、患者さんの話をよく聞こうと思っていた」と振り返る。患者の声にしっかりと耳を傾ける姿勢はこの時が原点だ。約4年間にわたって昼夜を問わず、往診や予防衛生活動などを行った。

開業から約4年後に転機が訪れた。県立厚生病



笑顔で患者と接する

院から声がかかったのだ。「経験がないなか、突然院長になったので、このままではいけないと感じていた。もっと経験を積みたいと思っていたので行くことに迷いはなかった」と話す。

## ｜ 病人を診る医師に

厚生病院で働き始めてすぐに当時の院長から言われた「病気を見る医者より病人を診る医者になれ」の言葉が座右の銘になった。この言葉を聞いてこれまでやってきたことが間違いないと実感した。

開業医とは異なる環境で苦労もあった。入って2年ほどたったころ、常勤の内科医が2人に。「いまのように循環器や呼吸器の区別はなく、ただ、内科、外科があるだけの時代。60人の入院患者を2人で診なければならず、とても忙しかった」と言う。

当時は女性の医師は珍しく、厚生病院に入った時に女性医師は一人だった。「大学時代も女性は60人クラスで4人だけだった。女性の更衣室がないので、夏場はトイレで着替えていた」と振り返る。

待合室で患者から「今日はオナゴか?」と心ない言葉をかけられることもあった。「そういった言葉も人間形成の糧になる」と言い聞かせ、むしろ女性であることの特性をいかし、患者にきめ細かい愛情を注いだ。

大学卒業後の研修医時代に結婚し、働きながら3児を育てた。

「医局で働いていたころはお腹が大きくなってはまだ務めていた。当時はまだ女性医師をサポートする制度はなかったが、母の実家や近所の人に見てもらったりしていた」

## ｜ 夫の死きっかけに再び開業

厚生病院に32年間勤務した後、平成



湯川医院と共に地域を見守る

11年に現在の湯川医院で再び開業医になった。三朝町で診療所を開いていた夫の死がきっかけだった。

「夫に胃がんが見つかったときには末期状態だった。症状がなかったというけど、エコーや胃カメラを見せてもらってびっくりした。これが分からなかったのかと。先が長くないと分かっていたので診療所を受け継ぐことにした」

湯川医院を始めて21年。診療所の窓口は広く、「旅館の風呂で滑って転んだ」「普段は倉吉の病院に行っているけど、待たされるから」などさまざまな理由で患者が訪れる。

「夫が厚生病院で手術した患者がいまも来ている。女性の方は私が女性ということもあって話しやすいのかもしれません」

自宅での看取りを希望する末期がん患者が増え、在宅医療も行っている。冬には道路の凍結やスリップに注意しながら自身の運転で患者宅に駆

け付けている。

「往診に行くと『湯川先生が来てごしなった』とマジックの大きな文字で書いてあった。待っている患者さんがいるからこれまで続けてきた」

32年間の厚生病院勤務時代、一度も病気で休んだことはない。人間ドックなどを扱う総合検診センターの部長を経験し、「健康な人を検診するのに私が不健康でいてはいけない」と意識してきた。自身の健康のため、エアロビクスやラジオ体操を続けている。

町役場やJA共済などの依頼で健康講話の講師も務める。聴講者に高齢者が多いため、語尾をはっきりと話すように心掛けている。患者の目線に立った姿勢は常に温かい。

少子高齢化で地方の医療環境は厳しさを増しているが、「健康に気を配りながらこれからも頑張っている仕事を続けたい」。そう力を込めた。

(坂田弘幸)



24時間365日、離島の医療を守る「かかりつけ医」

ときや内科 理事長

# 釈舎 龍三

[ 広島県 ]

ときや・りゅうぞう 医療法人妙好会ときや内科理事長。昭和33年、広島県木江町（現・大崎上島町）生まれ。61歳。川崎医科大大学院を修了し、川崎医科大附属川崎病院に勤務。平成3年から地元に戻り、父・龍夫氏を支える。8年にときや内科の院長を引き継いだ。



(寺口純平撮影)





大崎上島町の医療について話す积舎医師

瀬戸内海中央に浮かぶ大崎上島(かみじま)。広島県竹島市の南約10キロに位置する約43平方キロの島は、レモンなどの柑橘(かんきつ)類の栽培や造船などの製造業も盛んで、約7400人が生活している。島の南東部にある大崎上島町沖浦にある「ときや内科」を訪ねると、院長の积舎龍三医師が忙しく走り回っていた。

患者の診察をしたかと思えば、CTスキャンによる検査に向かい、すぐに別室へ移動して内視鏡を使った検査を行う。「看護師や検査技師、事務職員ら10人ほどが働いているけど、医師は1人だけですから」と泰然自若とした様子で話す。昨年4月に診療所を無床化したけど、それでも外来と往診は精力的に行い、島民たちの健康を守っている。

「24時間、365日いつでも診察するのが信条でやってきました」

高齢化率48%の島民たちのかかりつけ医として診察を続けてきて「がん患者が多い」ことに気づいた。それだけに早期発見、早期治療は最重要課題

だ。CTスキャンや内視鏡、胃カメラなど医療機器は最先端のものをそろえ、島民たちの健康に最大限の留意を払っている。

## ■ ここが「医療の最先端」

大崎上島は本州や四国と陸路でつながっておらず、移動手段は船しかない。急患が発生した場合は本州に救急艇の出動を要請するが、台風や濃霧、強風で水上アクセスが途絶えた場合には海上保安庁に要請することもある。

ときや内科は昭和元年、祖父の龍猛(りゅうもう)氏が開設した。父の龍夫氏も医者で「家業を継がないといけない」と感じていたという。平成3年、龍夫氏からの要請を受けて、故郷に帰島。以来、二人三脚で島の医療を支え続けてきた。

当時は大崎上島だけでなく、近隣の大崎下島、豊島のほか、愛媛県の岡村島、大下島からも患者が来院していた。昼夜を問わずに訪れる患者に対

して「待たせてはいけない。一刻も早く診察する」ため、寝る前には腕時計と靴下を着用する習慣が身についてしまった。それだけではない。「湯船にもつからなくなりました」と話す。どんなときでも患者が現れた際、あわてずに診療するために学んだ心がけだ。

診察範囲は、川崎医科大学附属川崎病院で勤務していたときよりも幅広くなったが、「これが日本医療の最先端だと思ってやりがいを感じていました」と言葉に力を込める。その気持ちは、約29年が過ぎた現在でも色あせることはない。

## 「最後は島で」をかなえる

近年は、「最期は島で迎えたい」という島民の要望に応じて、在宅医療にも取り組むようになった。木曜午後には、島内の5、6軒を回って往診している。

平成26年からは訪問看護師、ケアマネジャー、

福祉スタッフ、ヘルパーとの勉強会や研修会を開催。在宅で最期を看取った遺族らが参加するシンポジウムも開催し、町民らに在宅医療の必要性を訴えた。また、患者の意思決定能力が低下する場合に備えて、あらかじめ終末期医療を含めた意思決定のプロセスを決める「アドバンス・ケア・プランニング（ACP）」の普及啓発も呼びかけている。

実際に在宅医療でできることは限られているが「できることはする」をモットーに掲げる。投薬で痛みをコントロールして、患者がいきかに苦しまないようにケアをしていくが「これもある意味、一つの医療だと思っています」ときっぱりと話す。

今田美雪さん(69)の自宅では、87歳の母が在宅医療を受けている。釈舎医師が往診に訪れると、笑顔で出迎える母の姿に今田さんは「昼夜関係なく診察してもらってとても助かっています。夜中に電話をかけても、すぐに『とにかく連れてきなさい』と言ってくれます。診療所に通わなくていいので、自分た



「ときや内科」のスタッフと



大崎上島町の保健師と



広島県豊田郡大崎上島のときや内科



「サポートおおさき」の訪問看護師と



往診先の患者を診る



自ら内視鏡を駆使して検査も行う

ちのペースで治療に専念できます」と話した。

一方、夏の往診は蚊との闘いだ。クーラーを使わない高齢者の自宅もあり、「蚊に刺されると、かゆくて診察に集中できなくなりますから」と虫よけスプレーは必需品だ。

## Ⅰ 認知症のサポートも

在宅医療に加えて、27年からは認知症サポート医として、認知症患者のサポートや家族支援にも乗り出している。30年4月現在、広島県内の65歳以



自家用車を自ら運転し、往診に向かう

上の認知症患者は9.6人に1人だが、大崎上島町では6.5人に1人と高い割合となっている。だが、積舎医師は「それは大崎上島町が昔ながらの風情を残す田舎町だからです」と解説する。

認知症患者は都会では見捨てられ、見逃されがちだ。近所とのつながりが強い田舎町では、異常行動に走る人がいればすぐに近所に知れ渡り、見守るようになる。「福祉施設に入るだけでなく、デイサービスも受けられるようになった。家族にとっては、昔に比べて福祉面が充実し、選択肢も増えています」と解説する。町内で発生した交通事故などの検視を行うほか、学校医や幼稚園医、介護老人保健施設の嘱託医も務め、町の保健事業にも積極的にかかわるなど、離島のかかりつけ医としての存在を高めてきた。

そんな積舎医師に将来像を聞いてみた。

「理想的なのは健全な世代交代だと考えています」

しかし、一人娘(33)は麻酔科医で、跡を継ぐ意思はないという。現在は積舎医師が1人で切り盛りしているが、平成30年5月までは父の龍夫氏と2人の医師が診療にあたっていた。それだけに「まずは2人の医師による診療体制を確立することが目標です。無責任な形でやめるわけにはいきませんよ」と話し、後継者探しも進めている。

赤ひげ大賞の受賞については、「特別に変わったことはしていないのに、なぜ選ばれたのか」と戸惑いの表情を見せる。だが、「子供のころからお年寄りになるまで一貫して診療するのが医療の理想の形。医師として死ぬまで診療を続ける責任はあります。さまざまな職種の人たちとチームを組んで、患者を見守る体制ができてきたと思います」と力強く話す情熱は衰えることを知らない。(格清政典)

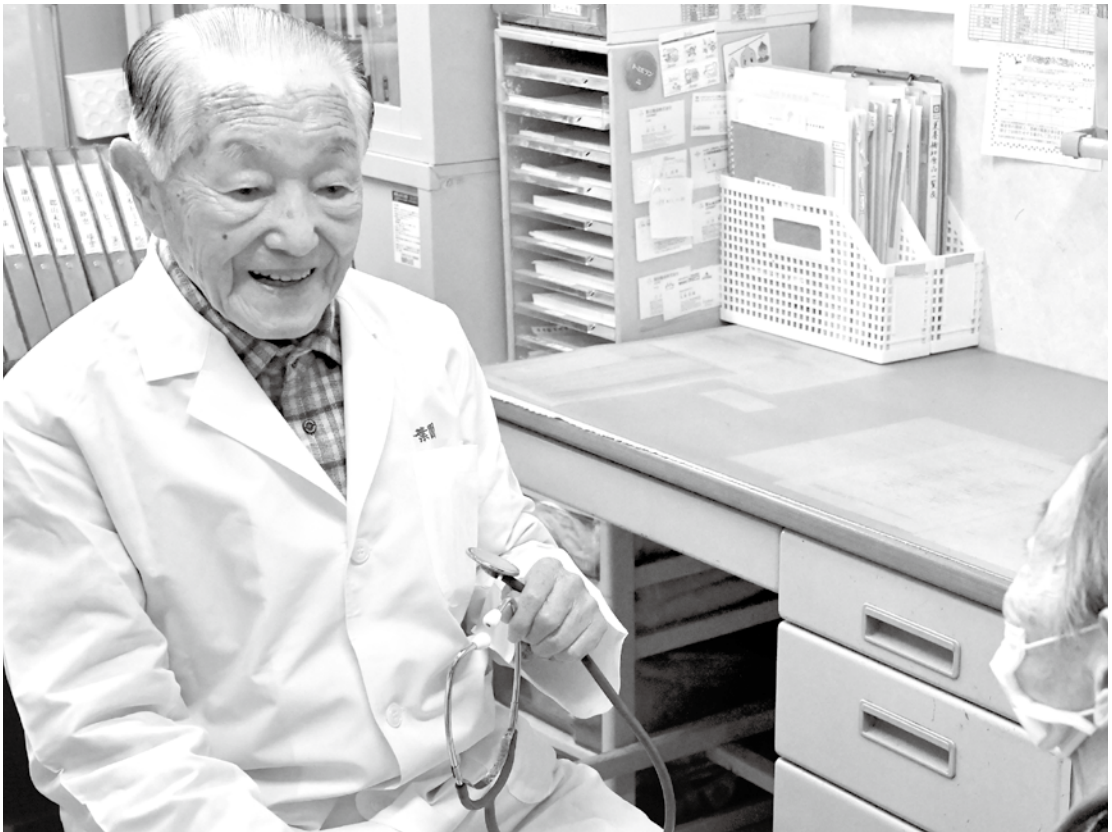
長年にわたり地域住民に寄り添う98歳の赤ひげ先生

医療法人・社会福祉法人桃蹊会 理事長

# 古江 増蔵

[ 鹿児島県 ]

ふるえ・ますぞう 医療法人・社会福祉法人桃蹊会理事長。大正10年、鹿児島県霧島市生まれ。98歳。千葉医科大学(現千葉大学医学部)卒業後、国立千葉病院、国立療養所霧島病院(鹿児島県)などを経て、昭和24年、鹿児島県横川町(現霧島市)に古江医院を開業。50年に身体障害者療護施設、霧島青葉園を開設し、その後も特別養護老人ホームや在宅介護支援センター、介護老人保健施設などを次々に開設。現在も、現役の施設長として障害者や高齢者の診察や支援に注力する。



(中村雅和撮影)

98歳になったいまでも、医師と施設長として二足のわらじを履く。現在は自宅から車で送迎されるが、数年前までは自転車通勤していた。

背筋はびんと伸び、受け答えもはっきりしている。かくしゃくとした姿は、間もなく100歳を迎える年齢を感じさせない。

「職員や患者の顔を毎日見ることが楽しみだね」

笑顔を見せながら、施設に入ると、愛車の電動カートにまたがり、ゆっくりと巡回する。

「まだまだ全然歩けるんだよ。それでも、立って回診するのと、カートだと入所者の反応が違う。同じ視線になることで、壁がなくなったんだろう。だから、あえてカートに乗っているんだ」

その言葉通り、入所者との距離は近い。

「先生、こんにちは」「はい、こんにちは。何か体に変わったことはないですか」

何でもないやり取りでも、入所者の表情はみるみる緩む。

「昔はみんな年上だったけれど、いまでは僕の方が上になってしまった。ただ、医師として新しい発見がある。だから本当に毎日が楽しいんだ」

## 母の言葉

医師を志したのは、母、タネさんの言葉がきっかけだった。

「増歳、医者になりなさい」

旧制中学に通っていたころだと記憶している。父は腎臓の病で古江氏が6歳のころに亡くなった。その後、雑貨店を営みながら女手一つで2人きょうだいを育てた母の言葉は、心に響いた。

「僕は成績もちょっとは良かったからね。それにし



施設内を電動カートで巡回し、入所者と触れ合う





診察では、互いの顔に笑顔が浮かぶ



施設長として運営に関する書類にも目を通す



98歳となったいまも毎日、車で送迎され出勤する



介護が必要な高齢者が入居するサニタイトーム



趣味は写真撮影。施設内にも多くのパネルが飾られる

でも、私と妹の2人をともに大学まで行かせた母は偉いですよ」

旧制七高を経て、千葉医科大に進んだ経緯について「田舎者だから、東京に憧れていたんだな」とはにかみながら振り返る。

大学時代は先の大戦真っ最中だった。「幸い、(下宿先などに)空襲の被害はなかったが、時代が時代だから、早く一人前になり、軍医として戦争に行くことしか考えていなかった」と語る。このころ、多くの医学生が繰り上げ卒業し、戦地に向かっていった。

昭和20年8月の敗戦で、繰り上げはなくなり、21年3月に卒業した。22年に医師国家試験に合格、千葉医科大の内科で勤務していたが、23年、帰郷を決める。首都圏の食糧事情の悪さなどが、背景にあった。勤務先は、故郷からほどちかい国立

療養所霧島病院に決まった。

七高を経て、東京で医師になった古江青年への期待は高かった。当時、近所に医院は数軒程度。交通事情の悪い山間部での、医療ニーズは高かった。

24年に古江医院を開院し、開業医として地域医療に携わりはじめた。

「患者はとにかく多かった。往診に出て、帰ってくると午後10時ぐらい。ペダルがついた自転車にエンジンが付いた程度の簡素なオートバイで、1日20軒ぐらいは回ったと思う。妻のマチ子(故人)も医師だったが、子供たちと一緒にご飯を食べたこともない忙しさだった。それだけはきつかったな」と語る。

## Ⅰ 日にした惨状

往診に加え、近隣の小中学校の学校医として地



域医療を必死に支えた。

そんな中で目にした地域住民の抱える苦しみ、  
夫妻に大きな決断を下させる。

交通事情が悪く、集落をまたいだ人の移動が少  
なかったこのころ、近親婚は珍しくなく、先天性障害  
を抱えた患者も多く診察した。中には納戸に押し込  
められていたケースもあったという。

惨状としか言いようのない光景の数々に、夫妻は  
心を痛めた。

放っておけない。

夫婦の思いは一致した。



施設開所時に植えた桜の木は、いまや背丈をはるかに超える

昭和50年、身体障害者療護施設「霧島青葉園」  
を開園した。

「家内が作ろうかと言ひ始め、じゃあ作ろうと。あまり  
難しく考えなかったね。家内が第一線でやりました  
よ」と謙遜する。

青葉園開園以来およそ半世紀、特別養護老人  
ホームや介護老人保健施設など複数の施設を手  
掛け、多くの身体障害者や認知症の老人などを受  
け入れた。

しかし、同業者からは冷ややかな視線を感じてい  
たという。

「いまでこそ、先見の明があったなどと言  
われるが、始めたころは『身体障害者の支  
援なんて…』などと思っていたでしょうね」と  
振り返る。

誰もが社会的弱者に手を差し伸べるよう  
な風潮でなかった時代から、私財を投げ打  
ち、力を注いだパイオニアだ。

## | 趣味人としても

福祉施設運営と並行し、医師としての仕  
事も続けた。一大観光地となった霧島温泉  
郷の観光客に急患が出れば、昼夜を問わず  
対応した。献身的な姿に、地元からの信  
頼は厚い。

また、写真から俳句まで嗜む趣味人とし  
ても、高い評価を受ける。

施設内には、県内外の名所を自ら撮影し  
た写真がパネルで並ぶ。また、地域住民を  
招いた句会も月1回開く。俳句誌『桃蹊(とう  
けい)』は、昭和53年の創刊から毎月欠か  
さず発行し、通算500号も間近に迫る。

医師としてのキャリアは70年を超えた。い  
までも、あくなき向上心を持つ。

「引退はない。患者と職員の顔を見ることが  
楽しみだから。生涯現役ですよ」

(中村雅和)

## 赤ひげ功労賞 受賞者

北海道

**増子 詠一**

増毛町立  
市街診療所  
所長



宮城県

**坂井 武昭**

坂井内科胃腸科  
理事長・院長



山形県

**小林 達**

朝日町立病院  
院長



栃木県

**赤松 郁夫**

足尾双愛病院  
院長



千葉県

**山田 茂**

鋸南やまだ内科  
院長



東京都

**故 前田 立雄**

前田医院  
院長  
(令和2年4月5日逝去)



山梨県

**天野 隆三**

天野医院  
院長



静岡県

**櫻田 修**

江間クリニック  
院長



愛知県

**山口 勇**

山口病院  
理事長



三重県

**駒田 敏之**

駒田医院  
院長



京都府

**川村 治雄**

渡辺西賀茂診療所



大阪府

**辰見 宣夫**

辰見医院  
院長



## 赤ひげ功労賞 受賞者

奈良県

**北浦 信子**

北浦医院  
東生駒診療所  
理事長・院長



和歌山県

**横矢 行弘**

横矢クリニック  
院長



徳島県

**笠松 由華**

かさまつ  
在宅クリニック  
小児在宅医長



香川県

**大森 茂**

大森外科医院  
理事長・院長



福岡県

**橋本 信男**

大山小児科医院  
院長



沖縄県

**中村 義清**

中村内科クリニック  
院長



# 全国の赤ひげ先生へのメッセージ

※全国の医師に対して寄せられた応援メッセージの一部を紹介します。

30年以上前、三女がひどい湿疹で頭もしるが出ているほど。家庭の医学書の最後のページで見つけた近くの小児科医院。どうしようと不安な私に少しずつ治していきましょうと優しい笑顔で声をかけて頂きほっとしました。その後、牛乳をやめたところだんだん良くなりました。4人目の子だったので母乳が止まるといやだと思い沢山飲み過ぎていたのが原因だったのかも。それから先生のところで4人とも何かとお世話になりいまは孫もお世話になっています。三女は22歳になりすっかりお肌もすべすべです。

先生に話しかけてもらうだけで、いつももう治った気分になるありがたい存在です。

ババールさん(50代)

はたから見たら普通にフルタイムの仕事をし馬拉ソンを趣味に持つ私は、実は肝臓の難病を抱えているため1カ月に1回通院しています。かれこれ治療を始めて3年が経ちました。先生との付き合いも3年目。先生はいつも親身。「若い人は大変だなあ」と言い私がより良く生きられるためにありとあらゆることを真剣に考えてくれます。仕事や治療がうまくいかないときや体の調子が悪いときは自暴自棄になりそうになりますが先生が救ってくれた命、真剣に向き合ってくれている命、無駄にはできないと思ひ頑張っって今日も生きています。

たかおさん(30代)

切迫早産で緊急転院することになり、無理なお願いを聞いて入院を受け入れてくれたのが先生でした。初めての妊娠で戸惑う中、24時間点滴をしながら、ひたすら病室の天井を眺める日々は何度も心が折れそうになりました。それでも、寝たきりの生活の中で心の支えになったのは、毎朝先生がひょこっと病室のカーテンから顔を出して話をしに来てくれることでした。赤ちゃんは大丈夫！そう思わせてくれる力を毎日もらいました。出産後、先生は転勤で県外に行ってしまいましたが、お腹の中の赤ちゃんの様子を嬉しそうに伝えてくるK先生の笑顔はずっと忘れません。ありがとう。

あやさん(30代)

肺ガンは町の小さな病院で見つかった。

咳が止まらず、長く通院していた母は一向に良くならず藁をもつかむ心地で先生の診察を受診した。簡単なレントゲン撮影で先生は異常を発見し、「これは大きな病院で見てもらったほうがいいよ。明日家族を連れておいで」努めて優しく先生は肺の状態を母に教えてくれた。私は母に付き添い先生の診断を覚悟して聞き、その足で県立病院の専門医を受診させ、そのまま母は入院した。母は豆粒の様な肺ガンを見つけてくれた先生に感謝しながら終活をし、2年後に亡くなった。

先生に肺ガンを見つけてもらったから、期限付きの人生を母は整理しながら生きることが出来たのだ。先生にいまでも心から感謝している。

ムーミンママさん(50代)

胸に良性とも悪性とも判断がつきにくい腫瘍が見つかり、急に「手術か経過観察か決めてくれ」と言われた病院に不安を感じ、広島にある乳腺外科クリニックで良い先生を捜しに探して、K乳腺外科クリニックのK先生のところに来ました。不安でどうにかなりそうだった私に、寄り添い、不安な思いを優しく聴いてくださった先生のおかげで、前を向いて歩こうと勇気をいただきました。手術、頑張れそうです。K先生のような先生が一人でも増えると、患者さんの心は救われるのだらうと思います。先生本当にありがとうございます。これからもよろしく願いいたします。

MKさん(40代)

お世話になっている先生は非常に気さくで病院外のスーパーや道端でお会いしても手を振ってくださったり体の加減を聞いてくださったりして優しさにあふれています。診察のときも笑顔で対応し回復に向かうと一緒に喜んでくれ、安心と信頼を感じます。話も丁寧に聴いてくださり不安を感じることなく治療に前向きになれます。先生のおかげで通院が苦痛でなくなりました。月に一度の受診ですが足取りが重くないのは先生のお人柄のおかげです。

びよん吉さん(50代)

日本医師会 常任理事 城守 国斗



第8回「日本医師会 赤ひげ大賞」は、昨年6月4日、日本医師会より都道府県医師会宛てに推薦依頼文書を発出し、8月30日をもって締め切らせて頂きました。

選考に当たりましては、10名の選考委員で「候補者推薦書」による事前審査を行い、その結果を基に、11月21日、日本医師会館で選考会を開催し、「赤ひげ大賞」受賞者5名並びに今回新たに設けました「赤ひげ功労賞」受賞者18名を決定し、その後、令和2年1月8日に、今回の結果を公表しました。

先生方は、病気だけではなく、患者さんやそのご家族が暮らしている地域まで診ておられ、まさに医療でまちづくりを実践する現代の赤ひげ先生です。

高齢社会を迎え、往診、在宅医療、看取りなど、日本の医療を支えているのは、今回受賞された先生方を始めとした地域医療に従事する先生方です。

本賞が、そのような先生方の励みとなり、地域医療の充実へとつながることを願っております。

2020年度

第9回「日本医師会 赤ひげ大賞」

● 推薦概要 ●

日本医師会

赤ひげ大賞

- 主催** 日本医師会、産経新聞社
- 後援** 厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
- 特別協賛** 太陽生命保険株式会社
- 対象者** 病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員及び都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日医・都道府県医師会役員は除く）。
- 推薦方法** 本賞受賞にふさわしいと思われる方1名を各都道府県医師会会長が推薦
- 受賞発表** 産経新聞紙上
- 選考** 日本医師会と産経新聞社の主催者側委員に第三者を交えた選考委員会において選定
- 賞状と副賞** 賞状、記念盾及び賞金



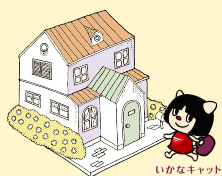
# 保険で、 認知症を 予防!?

人生100歳時代を、  
ずっと元気に生きていくため。  
保険にはもつとできることがあると、  
太陽生命は考えます。  
たとえば認知症保険も、治療だけでなく  
予防のためにも使えるよう進化します。  
太陽生命の「ひまわり認知症予防保険」なら、  
加入1年後から2年ごとに  
予防給付金が受け取れるので、  
軽度認知障害発症リスクの検査や  
様々な認知症予防のために活用できます。  
変化し続ける時代のニーズに、  
太陽生命は保険でお応えしていきます。

業界初

## ひまわり認知症 予防 保険

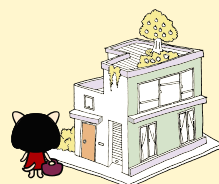
\*当広告では選択緩和型認知症診断保険に生存給付金特別を付加したプランを「ひまわり認知症予防保険」としてご案内しています。状態継続日数の要件がなく、所定の認知症と診断された時に保険金を主契約でお支払いする生命保険は業界初です。(2018年7月現在、当社調べ)



**ホケツケ隊**  
におまかせください。

お支払い手続きその場でサポート!

お支払い手続きの専門知識がある職員がシニアのお客様のもとへ直接訪問し、お手続きのサポートをいたします。



[資料のご請求は] お客様サービスセンター **0120-04-22-33** (通話無料)

営業時間: 月~金 9時~18時 / 土・日 9時~17時 ※祝日・年末年始(12/30~1/4)は休業します

<https://www.taiyo-seimei.co.jp/>  
太陽生命 